

ART



2022 → 2023

東京アートポイント計画

HAPPY TURN / 神津島

Artist Collective Fuchu [ACF]

ファンタジア!ファンタジア!
—生き方がかたちになったまち—

移動する中心 | GAYA

ACKT (アクト / アートセンタークニタチ)

多摩の未来の地勢図
Cleaving Art Meeting

カロクリサイクル

KINOミーティング

めとてラボ

Tokyo Art Research Lab

Artpoint Reports



ART

Artpoint Reports

2022 → 2023

はじめに

東京アートポイント計画は、地域社会を担うNPOとアートプロジェクトを行う文化事業です。2009年にスタートして、今年で14年目。わたしたちが目指しているのは、日常や地域に芸術文化が根つき、東京というまちが創造的な場所になっていくこと。そのために、アートプロジェクトを担う人材育成や活動基盤の整備なども行っています。

『Artpoint Reports 2022→2023』は、一年を振り返りながら、ちょっと先の未来について考えるレポートです。

もくじ

02 About

- 02 東京アートポイント計画とは
- 04 メンバー紹介

05 News

- 2022の取り組み

09 Voices

- 2022→2023について語る
- 09 公共性が育まれる場所
- 12 「わたし」を起点にしたネットワーキング
- 15 「表現」を使いこなす
- 18 協働の広がりを支える
- 21 まずは歩いてみることから

24 Annual costs

- 事業予算

25 Projects

- 事業一覧

31 Information

- お知らせ



2023

About 東京アートポイント計画とは

東京アートポイント計画は、地域社会を担うNPOとともに、社会に対して新たな価値観や創造的な活動を生み出すためのさまざまな「アートポイント」*1をつくる事業です。東京都、アーツカウンシル東京*2、NPO*3との共催で行っています。

当たり前を問い直す、課題を見つける、異なる分野をつなぐ——そうしたアートの特性をいかし、実験的なアートプロジェクトを通して、個人が豊かに生きていくための関係や仕組みづくり、コミュニティ育成に取り組んでいます。特徴は、専門スタッフであるプログラムオフィサーが、情報やスキルを提供しながら現場に伴走すること。複数年かけて、NPOが持続可能な活動を行うためのサポートを行っています。

また、アートプロジェクトの担い手のための事業『Tokyo Art Research Lab (TARL)』と連携することで、社会の変化に回答し続けています。

*1 アートプロジェクトが継続的に動いている場であり、その活動をつくる人々が集まる創造的な拠点のこと。アーティスト、運営スタッフ、ボランティア、参加者などさまざまな人によって形成されると考えています。

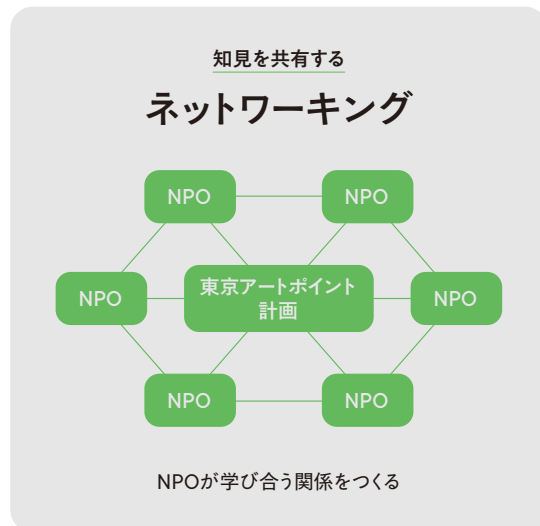
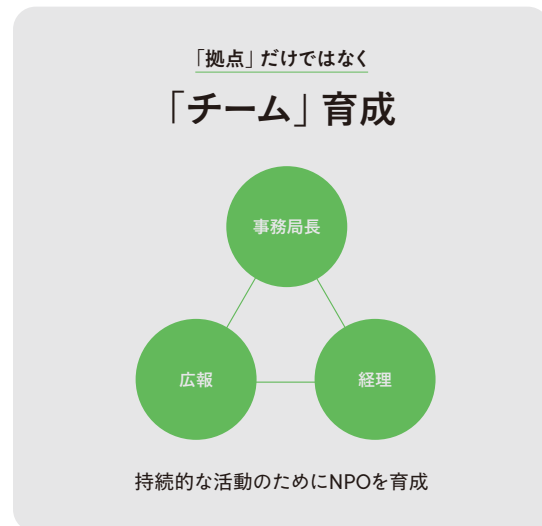
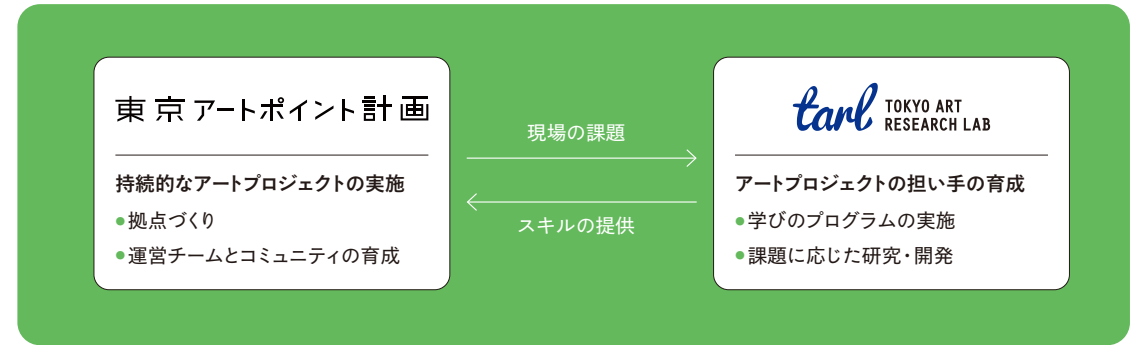
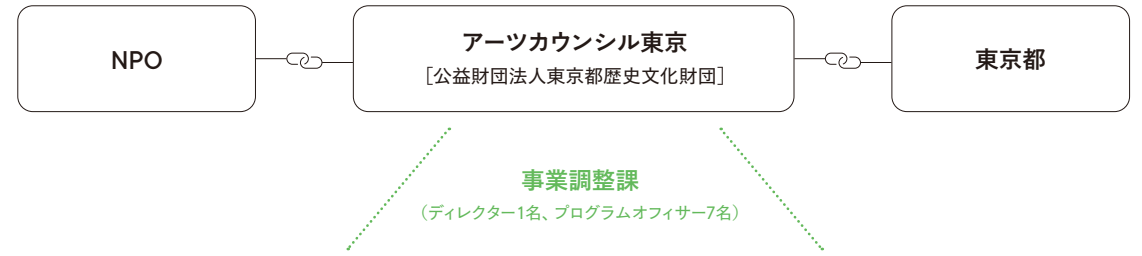
*2 アーツカウンシル東京は、都内で文化施設の運営や文化事業の実施を行う公益財団法人東京都歴史文化財団の一組織。都の文化政策に基づき、新たな芸術文化創造の基盤整備をはじめ、東京の独自性・多様性を追求したプログラムなどに取り組んでいます。

*3 特定非営利活動法人（NPO）のほか、一般社団法人など非営利型の組織も含まれます。共催相手には、市区町村などの基礎自治体、大学等も入る場合があります。

【組織・人員体制】

東京アートポイント計画は、アーツカウンシル東京の事業調整課が担当しています。都の文化政策の目的や課題を読み解き、事業の方向性を模索すること、NPOとの対話を重ねながら社会に向き合い、次の一手をしかけていくことを目指しています。

事業に伴走するプログラムオフィサーは、「政策」を担当する東京都と「事業」を企画・運営するNPOとの間に立つアートマネジメントの専門職です。文化政策と事業の二つの視点を行き来することで、文化事業としての社会的意義を高めています。



▶ 共催団体数 | 56団体 (2009～2022年度)

NPO : 46
 基礎自治体 : 7 (豊島区、荒川区、練馬区、足立区、小金井市、三宅村、国立市)
 大学 : 1 (東京藝術大学音楽部・大学院国際芸術創造研究科)
 財団 : 2 (公益財団法人せたがや文化財団 生活工房 / 公益財団法人くにたち文化・スポーツ振興財団)

▶ 共催事業数 | 45事業 (2009～2022年度) *年間約100件のプログラムを実施

▶ Tokyo Art Research Lab受講生数 | 1,869名 (2023年2月現在累計)

▶ 共催団体評価・選定会議委員

太下義之 (2015～) 文化政策研究者
 小山田徹 (2015～) アーティスト / 京都市立芸術大学 教授
 西村佳哲 (2015～) プランニング・ディレクター / リビングワールド 代表
 荻原康子 (2015～) 「隅田川 森羅万象 墨に夢」統括ディレクター
 竹久 侑 (2015～) 水戸芸術館 現代美術センター 芸術監督

▶ 外部評価委員

芹沢高志 (2011～) P3 art and environment 統括ディレクター

2022の取り組み

ウェブサイトを
リニューアルしました！

執筆 川村庸子

アートプロジェクトの担い手のためのプラットフォーム『Tokyo Art Research Lab』のウェブサイトを7年ぶりにリニューアルしました。これまで300人以上の「ひとびと」が取り組んできた115の「プロジェクト」と、そこから生まれた約280点の書籍や映像などを「資料室」にて無料で公開しています。プロジェクトと資料は、アートマネジメントの知見や時代に応答するテーマ、これまでの歩みなどのキーワードから検索することができます。

制作は、ウェブディレクターの萩原俊矢さんを中心にチームを編成。障害者専門クラウドソーシングサービス『サニーバンク』の協力を得て、視覚・聴覚・精神・発達・肢体不自由などの障害当事者の方にデザインや操作に対するフィードバックをもらいながら制作し、アクセシビリティの向上を目指しました。配色によって画面を見続けられなかったり、ボタンの位置によって次の動作が混乱したり。それぞれの特性や環境を起点に活発に話し合った結果が、かたちになっています。

また、『東京アートポイント計画』のウェブサイトも併せてリニューアルしています。2018年度以降の共催事業の実績をまとめるとともに、東京アートポイント計画の仕組みを紹介する英語ページも公開。ぜひ、一度訪れてみてください。



『Tokyo Art Research Lab』のウェブサイト

新しい共催事業が
三つはじまりました。

異なる身体性や感覚世界をもつ人々とともに、自らの感覚や言語を起点に共創する場づくりを目指すプロジェクトです。

3団体とも、現在の社会状況に対する問いや課題に対して、アートプロジェクトとして向き合っていく仕組みや展望を描いて応募してきてくれました。初年度は、まちを歩いたり、人に話を聞いたりしながら、これからの社会に必要なことを一つずつ手繰り寄せているところです。これから複数年かけた活動を通して、それぞれどのような風景が見えてくるのかお楽しみに！▶ p.12,15,21



『KINOミーティング』の活動風景

東京アートポイント計画では、昨年ともにアートプロジェクトを行うNPOを公募しました。現在の社会情勢に対する応答と、来るべき社会への準備として、「多文化・共生・コミュニケーション」「災間・減災・レジリエンス」というテーマを設定。40以上の応募があり、最終的に、2022年度から新たな共催事業が三つはじまりました！

一つ目は、震災後の東北で活動してきた一般社団法人NOOKによる『カロクリサイクル』。被災を経験した土地に蓄積されてきた記録物(禍録)をもとに、表現の技術などを共有するプロジェクトです。次なる災禍に備え、東京を歩き、さまざまな人々とネットワークをつくっています。

二つ目は、海外にも(も)ルーツをもつ人々とともに、「まち」や「ルーツ」について問い、映像制作を行う『KINOミーティング』。日本語、やさしい日本語、英語、中国語など、複数の言語を交えながら、作品づくりを通して、背景の異なる者同士の対話が生まれています。

三つ目は、手話話者が主体となり、コミュニケーションのあり方を見つめ直す『めとてラボ』。

05
2022の取り組み

(撮影 | 加藤 甫)

メンバー紹介

ディレクター

1 森司 (2009~) MORI Tsukasa

1960年愛知県生まれ。水戸芸術館現代美術センター学芸員を経て、現職。Tokyo Art Research Labディレクター。2020年度より東京都歴史文化財団共通事業として、クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョーの所管担当も務める。「最近は、ドリップコーヒーにはまっています。プレステもはじめました」

プログラムオフィサー

2 大内伸輔 (2009~) OUCHI Shinsuke

1980年茨城県生まれ。取手アートプロジェクトのTAP塾出身。前職は東京藝術大学音楽環境創造科教育研究助手。現在は全体統括を担当。共著に『これからの文化を「10年単位」で語るために—東京アートポイント計画 2009–2018—』(アーツカウンシル東京、2019年)。「ヤギのお世話をしたり、陶芸をしたりしています」

3 佐藤李青 (2011~) SATO Risei

1982年宮城県生まれ。小金井アートフル・アクション!実行委員会事務局長を経て、現職。『Artist Collective Fuchu [ACF]』『移動する中心 | GAYA』『ACKT (アクト/アートセンタークニタチ)』『多摩の未来の地勢図 Cleaving Art Meeting』『カロクリサイクル』、Artpoint Meetingを担当。「“災間文化研究”を続けています」

4 岡野恵未子 (2018~) OKANO Emiko

1992年茨城県生まれ。前職は茨城県北芸術祭実行委員会事務局。『ファンタジア!ファンタジア!—生き方がかたちになったまち—』『移動する中心 | GAYA』、Tokyo Art Research Labを担当。「日記を続けるコツを発見。年明けから続いています」

5 櫻井駿介 (2021~) SAKURAI Shunsuke

1990年神奈川県生まれ、東京都育ち。東京藝術大学大学院博士課程修了。インストラクター、アートマネージャーとして活動したのち、現職。『HAPPY TURN/神津島』『ACKT (アクト/アートセンタークニタチ)』『めとてラボ』、Tokyo Art Research Labを担当。「多肉植物を眺めてから出勤しています」

6 入江彩美 (2022~) IRIE Ayami

1990年茨城県生まれ。水戸芸術館現代美術センターで学芸アシスタント、アートラボはしもとで美術専門員を経て、現職。『HAPPY TURN/神津島』『ファンタジア!ファンタジア!—生き方がかたちになったまち—』『めとてラボ』を担当。「引越しをしってから、銭湯に通うようになりました」

7 小山冴子 (2022~) OYAMA Saeko

1982年福岡県生まれ。フリーランスのアートマネージャー、企画者として、さまざまな地域での芸術祭やアートプロジェクトに携わったのち、現職。『多摩の未来の地勢図 Cleaving Art Meeting』『めとてラボ』、Tokyo Art Research Labを担当。「出不精ですが、遠くに行くのは好きです」

8 川満ニキアン (2022~) KAWAMITSU Nikian

1994年沖縄県育ち。前職はせんだいメディアテーク企画・活動支援室職員。『Artist Collective Fuchu [ACF]』『カロクリサイクル』『KINOミーティング』、Tokyo Art Research Labを担当。「いまさらながら『TOKAKUKA』という曲にはまっています」

04
About

執筆 川村庸子

福祉施設「興望館」で 展示を行いました。



執筆 杉原環樹

People, Not For People」展です。碓井さんたちは、館に残された保育日誌や写真資料を丹念にリサーチ。展示会では、その写真をもとに施設関係者や保護者らと協働制作した刺繍作品や、碓井さんが過去の日誌を参照して書いた、昭和の興望館で働く架空の女性の日誌などが展示されました。「100年を超える施設の歴史をこどもたちや施設職員に伝えたい」と考えていた興望館からは、「アートならではの手法で館の歴史を見せることができ、新鮮だった」という声も。いまでは気軽に相談や提案をし合える関係を築いているという興望館とファンファン。こうした経験を通して、ケアとアートの重なり合う領域の可能性がいつそう耕されつつあります。

さらに、「地域にいるさまざまな人が文化的な活動に触れたり、創造力を培ったりしていくことができないか」と考えていたという行政と協働の可能性が出てくるなど、福祉とアートを巡るファンファンの創造力は、地域のなかで広がりを見せはじめています。

墨田区で活動する『ファンタジア!ファンタジア!—生き方がかたちになったまち—』(通称:ファンファン)では、2021年度より福祉施設「興望館」との共催事業を行っています。以前から、既存の「アート」に収まらない創造力を模索してきたファンファン。その過程で、アートと地域福祉のかかわりに関心を寄せたメンバーは、1919年からこの地で福祉事業を行う興望館にアプローチ。昨年度は美術家の碓井ゆいさんとともに、館内で学童向けの創作の場をひらきました。

その後、約1年にわたるリサーチや協働を経た行われたのが、「共に在るところから/With



「共に在るところから/With People, Not For People」展示会場の様子(撮影|加藤 甫)

映像コンテンツを 40本以上配信しました!

コロナ禍をきっかけに本格的に始動した映像コンテンツの制作。配信・収録の技術が徐々に向上し、オンライン配信した映像のアーカイブだけでなく、「教材」として使えるものが増えてきました。その数は、なんと40本を越えます!

日々のプロジェクト運営を支える言葉を紐解く「アートプロジェクトの運営をひらく、〇〇のことば。」や「アートプロジェクトの担い手のための配信・収録講座」の記録など、現場に必要な技術を基礎から学ぶことができます。また、引き続き「アートプロジェクトの担い手のための手話講座」が人気で、寸劇で学ぼう文化など、再生数が1万回に届いたものも。

今年度からスタートした「新たな航路を切り開く」は、2011年以降に生まれたアートプロジェクトと、それらを取り巻く社会状況を振り返りながら、これからの時代に応答するアートプロジェクトのかたちを考えるシリーズ。ナビゲーターは、人と環境の相互作用に焦点をあてながら、社会状況に応答するアートプロジェクトをつぶさに見続けてきた芹沢高志さん(P3 art and environment 統括ディレクター)です。ゲストとともにこの10年間を振り返り、来るべき時代に向けた新しい航路

を見出すことを目指しています。映像に登場する資料は著作権処理を行い、半永久的に見られるようにしました。

若林朋子さん(プロジェクト・コーディネーター/プランナー)の回では、企業・行政・NPOの変化を眺めながら、「挑戦と応答というよい循環だけでなく、挑戦の結果、はね返されることも歴史をつくることになっている」という発言が出るなど、実践的な知見だけでなく、日々の活動を後押ししてくれる言葉にも出会うことができます。



Tokyo Art Research LabのYouTubeチャンネル

大きな歴史のなかで見落とされがちな、日常の暮らしや街並み。その時代を生きた人々の記録の断片を集めたアーカイブを活用するプロジェクトが、『移動する中心|GAYA』です。共催パートナーのNPO法人remoが、2015年から世田谷区で家に眠る8ミリフィルムを集める活動をスタート。集めたデータはデジタル化し、アーカイブ『世田谷クロニクル1936-83』として、ウェブで公開しています。東京アートポイント計画に参加した2019年からは、この映像を見ながら語り合うワークショップ「サンデー・インタビューーズ」を実施。ワークショップを通して、参加者は自身の記憶を重ね合わせ、親世代が過ごしてきた時間について考えるきっかけになっています。

この手法をケアやまちづくりといった領域でも応用できるのではないか、と今年度さらに活用をを広げました。協働したのは、デザインリサーチャー・神野真実さんと、看護師兼写真家・尾山直子さん。約半年の間に50人を超える地域の人と、映像を起点に会話が広がりました。看護師の協力のもと、在宅医療を受けている方の自宅で映像を流すと、ある人は「玉電に乗った」「高

島屋に行った」など昔の暮らしを語りはじめ、かつて自身が繕い物をしていた頃のお裁縫箱を出して見せてくれたそうです。

尾山さんと神野さんは、この映像は「ケアにとって重要な、一人ひとりの個人史を知るきっかけになるし、過去を思い出して語ることは本人のこころの安定や自信の回復につながるのではないか」と言います。また、普段はケアする/される関係から、知識や経験を教える/教わる関係へ変化する場面もありました。誰かの撮影したホームムービーが、別の誰かの記憶を想起し、多面的な関係性を育む可能性が見えました。



在宅医療を利用している方の自宅で映像を鑑賞している様子(撮影|尾山直子)

在宅医療の現場で、GAYAの 映像鑑賞法を試みました。

執筆 佐藤恵美

Artpoint Meetingを 再開しました。

執筆 川村庸子

Artpoint Meetingは、アートプロジェクトに関心を寄せる人々が集い、社会とアートの関係を探るトークイベント。2016年に開始し、コロナ禍で3年近く休止していましたが、2022年度は2回開催し、計150名が参加しました。

10回目のテーマは「アートがひらく、“学び”の可能性」。『素材』に注目し、学びの環境づくりを行っている『多摩の未来の地勢図 Cleaving Art Meeting』と『Artist Collective Fuchu [ACF]』から活動報告がありました。小学校の図工の先生たちと授業で使える素材や技術の研究開発を行う宮下美穂さん(NPO法人アートフル・アクション)は、「学校の授業は教科ごとに分かれているけれども、一つの全体(whole)としての人間と出会うことが重要。そのきっかけとなるのが、自分が暮らしている地域であり、ものをつくろうとして稼働する身体であり、つくるなかで生まれる友だちや世界との関係。多様であることにとどまらずに、複雑さを丸ごと全体として捉える」と、手をつくることの今日的意義を語りました。

11回目のテーマは「映像を映す、見る、話す」。映像を介した活動を行う『KINOミーティング』

『移動する中心|GAYA』、福島県復興公営住宅を舞台にしたプロジェクト『ラジオ下神白 あの時 あいまちの音楽から いまここへ』の活動報告と上映会を行いました。それぞれのディスカッションでは、「Thinking Audience(考える観客)」や「観る人が発見する」など、三つのプロジェクトに共通するキーワードが浮かび上がってきました。映像をつくるプロセス、そしてそれとともに見て、語ることを通して生まれる関係性について言葉を紡ぎました。



Artpoint Meeting #11「映像を映す、見る、話す」の会場風景(撮影|阪中隆文)

公共性が育まれる場所



櫻井 駿介
SAKURAI Shunsuke

島暮らしの「幸せなターン」のかたちを探る『HAPPY TURN／神津島』。
拠点「くると」で起きた出来事を通して、アートプロジェクトの拠点のあり方について考えます。

地域に「何でもない場所」という穴をあける

—— 拠点「くると」が、集う人たちにとって「居場所」になりつつあると聞きました。あらためて、「くると」が生まれた当時の状況と、現在の様子について教えてください。

「くると」は、2019年度に空き家を改装してスタートした、誰もが集まれる「何でもない場所」です。さまざまな人とかかわりしろがもてる場所にしようと、あえて固定された役割をもたせず、解体や掃除などのプロセスを共有しながら、意識的に場所をひらいてきました。

もともと神津島には、昼間に気軽に立ち寄り、集まったりできる公共の場所が少なかったんです。公民館やカフェも、時間や目的を気にせず自由に過ごせるわけではない。子連れで行っていい場所や、こどもたちが好きに遊べる場所となると、なおさら限られてしまいます。約1,900人が暮らす島で、「くると」は、まさしく「来ると」誰かに出会えたり、自分で遊び方を見つけたりできる公園のような存在になってきているように思います。

最近では、20～30代の移住者やお母さんたち4名が、

運営スタッフとして活動へ参加してくれるようになったのが大きな変化です。また、小学校の授業と連携したり、島外から招いたアーティストとの企画をきっかけに中高生も顔を出したりしてくれるようになりました。

また、島にはU・Iターンの移住者が一定数いるのですが、初めて、あるいは久しぶりに島を訪れて既存のコミュニティへの入り口がわからないとき、「くると」が島のホットスポットや頼れそうな人などの情報にアクセスできる場所としても機能しているようです。島で暮らす方々だけでなく、新たに島へ来た人が訪れる場所になったのは意外でしたが、結果的に、島にかかわる人々が必要としているものが自然と「何でもない場所」という余白に滲んでいったんだと思います。

—— 「何でもない場所」というあり方は、東京アートポイント計画のほかの拠点でも意識しているのでしょうか？

2021年度からはじまった『ACKT（アクト／アートセンタークニタチ）』も、あまり目的を定めないように拠点をつくろうと試みています。今年はその一歩として、国立駅から続く大通りの緑地帯で「・と-TENTO-」

手話通訳者との運営方法を模索しました。

東京アートポイント計画では、9つの共催団体とともに「事務局による事務局のためのジムのような勉強会」（通称：ジムジム会）を約2か月に一度開催しています。それぞれの悩みを持ち寄って運営や広報について学び合う「互助会」のような取り組みです。今年度は、手話を第一言語とするろう者やCODA（ろう者の親をもつ聴者）を中心とした『めとてラボ』が共催パートナーに加わったこともあり、ジムジム会も手話通訳やUDトークを導入するなど、アクセシビリティを高める運営方法を模索しました。

手話は手指の動きだけでなく、視線や顔の動きなど、上半身すべてに文法がある視覚言語。そのため、どんなときでも手話で話す人の姿をしっかりと見えるようにすることが重要です。例えば、オンライン会議では、手話通訳者の画面をホスト側で固定して、資料を画面共有しても常に一定の大きさで見えるようにすることが必要になります。最初の頃は画面から手話通訳者が見えなくなってしまったり、自由参加の交流会までの通訳依頼ができていなかったりと、失敗を重ねながら運営のポイントが少しずつ見えてきました。現在は、事前に資料を共有して、内容や流れ、言葉の

ニュアンスなどについて打ち合わせをし、ろう者と聴者で情報の不足や齟齬が出ないようにしています。

参加者からは「自分の話していることが手話になっていると思うと、話す速度や言葉遣いを意識する瞬間があった」という声がありました。手話を使っている人が実際に仲間にいることで、どうやったら伝わるのかを具体的に考える、実践的な学びの場となりました。どうしたら誰もが参加できる場になるのか、これからは試行錯誤を続けていきたいと思っています。▶ p.18



手話通訳者が参加するジムジム会の様子
(撮影 | 加藤 甫)

今年も10冊の本ができました！

衣子さんによる『しゃべりながら観る』です。「会話型鑑賞」とは白鳥さんの鑑賞法。「対話型鑑賞」では「何が見えているか」を対話しますが、白鳥さんは「どう感じるか」を一緒にいる人たちの会話から引き出していきます。そこで話されるのは個人の感覚や記憶であり、作品とは関係ない話題に飛ぶこともしばしば。じっくりと観察し、学習するのが目的ではなく、作品を介してコミュニケーションを楽しむところに軸を据えているのです。会話型鑑賞の手引き書ともいえる一冊となっています。



校正中のドキュメントブックの様子

毎年、プロジェクトのドキュメントや手法などをまとめた冊子を制作し、年度末に発行しています。今年発行した10冊の本のなかから、注目の2冊を紹介しましょう。

1冊目は、2023年3月で役目を終える「ROOM 302」の活動をまとめた『DOCUMENT302 アートプロジェクトの担い手たちのラボ ROOM302の記録2009-2022』です。東京アートポイント計画の拠点として、3331 Arts Chiyodaの302号室にレクチャールーム兼アーカイブセンターを構えたのが2010年。壁一面に本棚をつくり、国内外のアートプロジェクトに関する書籍や資料を収集、公開し続けてきました。同年に人材育成事業『Tokyo Art Research Lab』もスタート。世代を問わず多くの人が集う学び舎として歩み出します。コロナ禍では映像の収録・配信スタジオ「STUDIO302」を開設。本書では、ROOM302にかかわった10名の寄稿も収録。3度のリノベーションを重ね、時代とともに変化した空間の10年以上にわたる軌跡をたどります。

2冊目は、美術鑑賞を続けてきた目の見えない白鳥建二さんと、アートエディタラー・佐藤麻



「・と-TENTO-」では、まちの地図を眺めながら会話に花を咲かせた

というプロジェクトを行いました。見慣れたまちの一角に、見慣れぬテントが突如出現する。それだけで「何やってるの?」と通りかかった人たちとの会話はじまって、気づけば、地域のおもしろい情報が人のつながりとともに集まってきたのが興味深かったですね。「あんなところに人が住みはじめたぞ」と近隣の高校の新聞部が取材に来て、そのご縁から一緒に広報紙の記事づくりをするということも起こりました。

まちなかで同じように人が集う場所でも、例えばあるお店だと、来る人は「客」で、提供する人は「店員」という関係性が既にできあがっていて、やることや役割が固定されていることが多いです。ですがアートプロジェクトにおける拠点は、地域のなかに「何でもない場所」としてポカンと穴をあけるから、そこへ地域に必要なつながりがじわりじわりと集まってくるんだと思います。

自分にとって必要な場所

——「何でもない場所」が成熟して、新しい動きが見えてきた神津島ですが、現在島の人たちはどのようにプロジェクトへかかわっているのでしょうか?

移住者やお母さんのスタッフたちが、「くると」のお店番としてかかわるようになって約1年。最近は拠点だけではなく企画の運営にも携わりはじめ、アーティストとの打ち合わせにも参加しています。一つのイベントが終わると、それに対して「わたしはこう見た!」と4者4様のレポート記事が上がり、もともとコンテンポラリーダンスの経験がある人が自身の経験をいかした企画を提案するなど、みなさんほんとうにいきいきとしていますね。プロジェクトの受け手からつくり手へと関係性が変化し、4人それぞれが拠点の顔になって、さらにかかわりしろが生まれていく。互いに影響を受け合って、プロジェクトも活気づいています。

そんなスタッフたちにとって、「くると」がどんな場所なのかを象徴するエピソードがあって。事業の価値について話し合っていたとき、スタッフの一人が「子育てをしながらかかわれる場所があることは、とてもありがたい。ここは、まず自分にとって必要な場所なんです」と語りはじめたんです。「知り合いも多くないし、子連れで行ける場所がないから、こどもとふたりでずっと家にいるしかなかったけれど、ここに来ればいろんな人と話ができる」と。

なかにはご家族の転勤を機にU・Iターンをして島で暮らしはじめた人もいて、例えばご家族が学校の

先生や警察官といった公務員だと、だいたい3年周期で島を去る場合が多いそうです。でも、その人たちも島で日々を暮らすことに変わりはなく、ここに居場所を見つけられたら、島に愛着が湧いて、その後の「幸せなターン」につながるかもしれない。そうやってできた居場所は関係性そのものなので、いつか物理的な場所がなくなったとしても残っていくのではないかと、現場を見ていると思うんですよね。

拠点をづくりはじめた段階ではここまで想定しきれていませんでしたが、「何でもない場所」であることで、かかわり方の多様さや働きやすさにつながり、一人ひとりが「ここにいていいんだ」という感覚をもちながら、自分の想いを場所に投影していく。地域の人々の潜在的なニーズを受けて、拠点がそれぞれの「居場所」になっていくのだと思います。

役割を固定しない、誰かのものにしない

——確かに、場所にそれぞれの悩みややりたいことなどの想いを投影することで、自分にとっての居場所になっていくのかもしれませんが、今後はどんな展開を期待しますか?

カフェなどのお店も、もちろん誰かの居場所になると思うんです。ただ、どちらかというともう場所が居場所にならなかった人にとってもかかわり

しろがあるところがアートプロジェクトならではのあり方だと思っています。そうしたことが起こりやすい「何でもない場所」であり続けるためには、「役割を固定しない」「誰かのものにしない」ことが重要です。「くると」がはじめてから機能を決めて運営したり、誰かひとりのためのものになったりしたら、きっと今回のような出来事は生まれなかったでしょう。

アートプロジェクトの拠点は、かかわる人も活動も、どんどん変わっていきます。だからこそプログラムオフィサーは「伴走」する必要があるのだと思います。既に機能や方向性が決まりきっていることをやるのであれば、伴走する場面は少ないでしょうから。そこで起きた出来事を受け止めて、気配のようなものを察知しながら、あの人にもっとかかわってもらおうとか、ここから先は決めないでおこうとか、このルールは守ろうとか、その都度話し合いながらともにつくっていく。

自分が居場所だと思えるような場所は、スタッフたちがそうだったように、誰かから与えられるのではなく、ときには自分で価値を見つけて獲得しなくてはいけない。そうやって、複数の人間が取り組んだ場所にこそ公共性が育まれるのだと思います。そのための準備運動になるような時間を、これからも意識し続けていければと思っています。



「くると」での日常風景



「わたし」を起点にした ネットワーキング



小山 冴子
OYAMA Saeko

誰もが「わたし」としていられる場所を目指し、活動する『めとてラボ』。
初年度の活動を振り返ります。

アメーバ状の有機的な動き

——『めとてラボ』とは、どのようなプロジェクトでしょうか？

国や人種といった大きな属性や、偏ったイメージ、社会的につくられたラベルなどでくるのではなく、誰もが「わたし」という個人として安心していられる方法を探ること。また、互いの感覚や身体性を認め合い、創発的なコミュニケーションができる場をつくることを目指して生まれた活動です。そのためにまずは拠点を構え、実験的な試みをしていきたい、というのが最初の計画でした。

しかし、具体的な場所をもつと、運営や管理に時間や予算を割かれてしまう。そこで、まずはリサーチからはじめるのはどうかと提案し、この一年間は主にリサーチをしてきました。「わたし」を起点にするとはどういうことなのか、それを実現するためにはどういった環境が必要なのか、メンバーが既にもっている知見やネットワークをいかしながら掘り下げ、まずはしっかりと活動基盤をつくりたいと思っています。

——今年活動基盤をつくるための、リサーチと思考の年だったんですね。メンバーは何人くらいで動いているのでしょうか？

プロジェクト名の「めとて＝目と手」とは視覚言語である手話を表していて、ろう者、難聴者、CODA（ろう者の親をもつ聴者）など、主に手話を使うメンバーで構成されています。コアメンバーは6人ですが、伴走している手話通訳チームが4人ほど、さらにアドバイザーが数人いるので、かかっている人数は全部で10人以上になります。

特徴的なのは、誰かひとりがディレクションしていくようなチームではないこと。活動のなかでさまざまなものに出会いながら、必要なトピックはいつの間にか担当分けがなされ、同時進行で各自が主体的に動いています。それはチーム内だけではなく、焦点が定まるとかれらのネットワークでさまざまな情報が集まるし、すぐに動き出して連絡網が広がるなどネットワークづくりのスピードが速く、アメーバ状というか、有機的で、見ていてとてもおもしろいと思っています。

異なる言語をつなぐ、 仕組みやツールの研究

——この一年はリサーチに重点を置かれていたということですが、具体的にどのような活動をされていたのでしょうか？

まずは自分たちの感覚や視点を起点にしながらリサーチを行っています。今年度は「デフスペース」のリサーチ、それから「つなぐラボ」、もうひとつは手話文化の「アーカイブ」の主に三つのプロジェクトを行いました。

「デフスペース」とは、アメリカにあるろう者のための大学・ギャロデット大学が、ろう者の身体感覚や手話言語からなる会話空間をもとに、空間設計やデザインのガイドラインをまとめた際に生まれた概念だそうです。例えば、手話で会話がしやすいように1階と2階を吹き抜けにしたり、間接照明を配置して目に優しい環境をつくったりするなど、手話でのコミュニケーションに適した設計をされた空間です。

「デフスペース」という言葉は日本でもまだあまり知られていませんが、それに近い空間や環境があるのではないか、と各地をリサーチしています。文化施設も併せて視察していて、福島では、はじまりの美術館、福島県立博物館、西会津国際芸術村に行きました。そうしたリサーチのなかでコミュニケーションについての気づきがたくさんあり、「つなぐラボ」

につながっていきました。

視察の際、メンバーは手話通訳を介して話すのですが、お互いに異なる言語を使う者同士なので、話すリズムが違ったり、そのせいで質問したいことがあってもタイミングがつかめず遠慮をしてしまったりと、対話をする際のズレや、通訳が間に入るときのルールを共有する難しさなどをあらためて実感したようです。そこから、異なる言語を「つなぐ」ために何が必要なのかを考え、環境整備やツール開発をできたらとはじまったのが「つなぐラボ」です。

「つなぐラボ」でも、まずはヒアリングからはじめています。今年度は、ろう者の日本手話講師の方や、現代美術・舞台芸術の通訳や翻訳を手がけている方など、異なる言語や文化の間をつなぐ仕事をする人に話を聞いています。

ゆるやかなネットワーキングがつくる未来

——先ほど三つ目にあげられていた「アーカイブ」では、何をしていたらいいのでしょうか？

めとてラボには、手話やろう文化の記録を残し、引き継いでいきたいという強い想いがあります。実は2009年に学習指導要領が改定されたついで十数年前まで、ろう学校の教育現場では、口話（口の動きを読み取り発話する方法）が教育の中心で、手話を使うことは禁止されていました。それに視覚言語である手話を音声や文字で残すのは、なかなか難しい。



「デフスペース」や文化施設のリサーチで、西会津国際芸術村とろう者の自宅を訪れたときの様子（撮影 | 齋藤陽道）

「表現」を使いこなす



佐藤 李青
SATO Risei

過去の記録を現在に活用する『カロクリサイクル』。
夏に行ったワークショップから見てきた、表現をする可能性について語ります。

「^{かるく}禍録」をリサイクルする

—— 2022年4月からスタートした『カロクリサイクル』とはどのようなプロジェクトでしょうか？

震災後の仙台で活動してきた一般社団法人NOOK（のおく）のメンバーが、東京に活動拠点を移し、東京アートポイント計画の事業としてはじめてプロジェクトです。「禍録」とは災禍の記録のこと。過去の記録を活用することで、現在の新たな表現やネットワークづくりにつなげるという意味で、「リサイクル」と称しています。仙台でも、東日本大震災をはじめ日本各地の災禍をリサーチしていましたが、東京でもネットワークをつくりながら、記録や表現を共有していくことを目指しています。

—— 災禍をリサーチすること、記録すること、表現すること、そしてネットワークづくりが主な活動内容ですね。

初年度の2022年は、リサーチとネットワークづくりが比重としては大きかったです。NOOKのメンバーは、2011年から東日本大震災の記録と表現に取り組んできましたが、そのなかでほかの地域や過去の災害の経験も同時にリサーチしていました。災害を単

体で捉えるのではなく、もっと幅広い視点で情報や表現を交換していきたいと考えたのが、『カロクリサイクル』につながっています。

今年度は主に都内の災禍にまつわる資料館などをリサーチしながら、YouTubeの配信やnoteでの執筆を通して企画や情報発信をし、地域の歴史に詳しい「NPO法人江東区の水辺に親しむ会」と勉強会を行うこともしました。

—— 都内のリサーチは、どのような場所に行かれたのでしょうか？

まちを歩いたり、さまざまな資料館に足を運び、展示を見たり、そこで出会った人たちに話を聞いたりしました。例えば、荒川の洪水の歴史を展示する「荒川知水資料館（アモア）」や、戦時下の慰安婦問題を扱った「わたしの戦争と平和資料館」、関東大震災と東京大空襲で亡くなった方の遺骨を安置する「東京都慰霊堂」、1954年に水爆実験により被害を受けた漁船のある「東京都立第五福竜丸展示館」などです。その記録はnoteに「カロク採訪記」としてまとめています。

そういうこともあってか、手話についての歴史的な資料があまり残っていないとか、ニュース映像以外の記録映像がなかなか見られないという状況があるようです。

そこで、あるろう者の家庭で撮影されたホームビデオを見つけたことをきっかけに、アーカイブを収集したり活用したりする取り組みをはじめました。暮らしのなかにある日常的な手話の記録から、その歴史や文化をあらためて見出し、残していくための取り組みです。

—— この一年で土台づくりをされていたことがよくわかりました。

わたし自身、とても学びの多い一年でした。知らなかったことも多く、自分がこれまでいかにろう者の世界に目が向いていなかったのかを思い知らされました。最初の頃は、この取り組みをどのように説明しているのか、言葉にできないところもありましたが、リサーチやディスカッションを続けるうちに、チーム全体でもこのプロジェクトや実現したいことのイメージが共有できてきて、徐々に数年後の風景が見えてきたように思います。今年一年の出会いや経験を通して、“誰もが「わたし」を起点にできる共創の場”をつくるために何をすべきか、自分たちがいま必要としている活動は何かが具体的にになってきた

ように思います。

—— これからの活動が楽しみです。来年度の予定はありますか？

今年は福島のほか、愛知や長野など国内を重点的にリサーチしましたが、同時に海外在住の研究者ともやりとりをはじめていて、海外リサーチも進めていこうとしています。これまで出会った人たちとも新しい話がはじまりつつあり、さまざまな人と出会いながら、輪を広げています。

これまでの東京アートポイント計画の共催事業を振り返ると、アーティスト主導のプロジェクトや、ディレクター・事務局・運営スタッフといった組織図の明確なプロジェクト、コレクティブ的なプロジェクトなどがありましたが、『めとてラボ』はコレクティブともちょっと違う、もっとゆるやかで有機的なネットワークだなと思います。

それは、あくまでも「わたし」から出発するために、一人ひとりと協力関係をつくろうと試行錯誤しているからこそできていることなのかもしれません。一つひとつの出会いを通して新たな課題を見つけ、そこからまたプロジェクトを動かしていく。この活動が今後どのように広がっていくのか楽しみに、伴走していきたいと思っています。



ホームビデオを見ながら語り合う「アーカイブ」活動の様子
(撮影 | 加藤 甫)



ワークショップ「記録から表現をつくる」の参加者が、東京都慰霊堂を見学している様子



ワークショップ「記録から表現をつくる」最終日の展示風景

「表現」というハードルを下げる

—— リサーチに主眼を置きながらも、ワークショップ「記録から表現をつくる」も行っていましたね。

オンラインと対面を混ぜて4日間開催しました。NOOKのメンバーであるアーティストの瀬尾夏美さんと磯崎末菜さん、演出家の中村大地さんをファシリテーターに、20代から50代までさまざまなバックグラウンドをもった人たちが10名以上参加。1～2日目は「記録から表現をつくる」事例を学んだあと、参加者の経験を共有するワークショップを行いました。3日目はファシリテーターに自由に相談できる日が設けられ、4日目はそれぞれが表現を持ち寄り発表しました。

—— どんな人が参加されていたのでしょうか？

美大生やカメラマンなどいれば、表現活動から遠い職業の人もいて、世代もばらばらでしたが、たった4日間でみなさん仲良くなり、その後も議論を重ねて、3月には展覧会を行いました。「表現のハードルが下がった」といったコメントがいくつもあがったことも印象的です。ワークショップのなかで参考として紹介された「表現」の例もよかったのだと思います。墨田区で震災と戦災の土地を巡るまち歩きツアーをガイドしている方の話を聞き、ツアーで配られる自作のマップに注目して紹介しました。江戸時代の怪談をもとにした、語りのパフォーマンスも反響がありましたね。

—— 記録と表現の好例を見てから参加者それぞれの経験を交換したのですね。特に印象に残っている表現などはありますか？

多摩ニュータウンに住む写真家の方は、自分の住む地域にタヌキがよく出没するので気になっていたから、それはニュータウンが山を切り崩してつくられた土地だったからという話をしていました。展示されたものは、「タヌキ」という言葉で検索した画像、自分が撮影した写真、多摩ニュータウンの昔の地図、町田市によるタヌキの統計資料、関連する映画や絵本の内容など。普段の仕事では、写真だけが最終的な「表現」ですが、今回のように「プロセスを見せていいと気づいた」と話していました。

それから閉店したカレー屋が好きだったという会社員の方は、元店長に当時お店で出していたカレーを自宅で作ってもらい、その様子をホームビデオで撮影していました。カレーづくりは失敗して終わるんですけど(笑)。最初はワークショップの事例に影響を受けて戦争を題材にしようとしていたものの、カレー屋の話をしたときに、ほかの参加者から「おもしろい」と言われたことが、身近なアウトプットにつながったように思います。

今回のワークショップで大きかったのは、それぞれの見ているものや感じているもの、関心のあることを他者と共有するプロセスだったと思います。それが「表現」というハードルを下げることもつながったのでしょうか。

「事業」から「運動」になっていく

—— 共有することで、自身の経験や考えを受け止められる。受容される場があるからこそ、表現が生まれるんですね。

表現までのプロセスを共有し、互いに話を聞く場があったことが重要でした。参加者の相談に乗っていた瀬尾さんと磯崎さんは美大出身ですが、大学の授業では完成した作品を見せる場はあってもお互いにプロセスを共有したり議論したりする場は少なかったそうです。今回は参加者が、それぞれの関心から調べたことを共有するために「表現」することが目的だったので、この方法がとてもよかった。短期間で仲良くなり、コミュニティが生まれたのもそのためだと思います。

—— ここでの「表現」とは、アーティストの「作品」よりももっと広い意味ですね。あらためて、東京アートポイント計画にとっての「表現」とはどのようなものでしょうか？

自分の関心のあること、伝えたいことを誰かと共有する方法のようなのだと思います。東京アートポイント計画では、表現までの過程を共有したり、議論したり、それがきっかけで生まれる関係性を大事にしてきました。その環境をつくっていくことをサポートしたい。最近、アートプロジェクトは「事業」「活動」

「運動」という見方で整理できるのではないかと考えているのですが、まさに「運動」の視点が見えた気がします。

例えば映画のワークショップをしたら、どんな映画ができたか、参加者が何人いたかという目的と成果があるのが「事業」だとして、その事業をきっかけに勉強会や上映会など自主的な「活動」が生まれていきます。東京アートポイント計画では、これまで「事業」をつくりながら、かかわった人たちの「活動」を大事にしてきました。そして、それらの活動は、いまの社会に新しい考え方ややり方を提示する「運動」の側面も持っている。事業や活動を通して何が生まれたのか、それを「運動」の視点からも伝えていく必要性を感じています。

今回だと、ワークショップという「事業」に集った参加者が、そのあと展示などの「活動」を行いました。それは、普段はハードルが高いと思っていた表現のあり方を転換するという「運動」にもなっていた。それが可能だったのは、ただ関心を語り合うだけでなく、まず表現し合う関係があって、参加者のコミュニティが生まれていたから。表現を自分なりに使いこなすことで、普段は出会わないような人たちと知り合い、一つの場をつくることできる。そうした表現の可能性をひらくことが、東京アートポイント計画のそれぞれの現場で起こっているのだと思います。

「事業」「活動」「運動」の図
(Tokyo Art Research Lab YouTube「アートプロジェクトを紐解く5つの視点」佐藤李青:3.11からの眺め)より)

事業	活動	運動？
<ul style="list-style-type: none"> いわゆる「事業」 所与の資源を使うことで、成果をコントロールするもの 資源は目的や意図のあるもの(おもに公的資金) 	<ul style="list-style-type: none"> 事業の範囲を「はみだす」 関わる人たちの「自発性」のある動き(生まれるもの) → 自らの生活のやりかた・考えかたを変える・役立つ ※「装置」が事業を活性化させるのに大事? 	<ul style="list-style-type: none"> 活動が示唆するコンセプト(考え方)や技術(手法)が同時代的に、異なる事業や活動を生むこと ・地理的な範囲を超えて、メディア(人の集まり、ことばなど含む)や表現を介して伝播する
<ul style="list-style-type: none"> 何が達成できたか？(目的/成果、費用対効果……) 	<ul style="list-style-type: none"> 何が起こったか？(かかわりづくり、自治、主体性……) 	<ul style="list-style-type: none"> 何を生んだか？(やりかた、用語、シーン……)

※ 生態系：一定の地理的・領域的範囲で起こる実践の連鎖・ネットワークの総称

協働の広がりを支える



大内伸輔
OUCHI Shinsuke

9つの共催団体と行っている「事務局による事務局のためのジムのような勉強会」(通称：ジムジム会)。
今年、共催団体同士や卒業団体との交流が盛んに行われました。

一度引き取って、またそれぞれの現場へ

—— 2019年度からはじまったジムジム会も4年目。
今年はどうな展開がありましたか？

この4年の間にコロナ禍でオンラインの比重が高まり、これまでと同じようにやっていたは通用しないことが増えてきましたよね。さらに現在は、「ウィズコロナ」へと社会が手探りで進んでいる状況だと思えます。こうした社会の変化に対応するための方法を模索することを通して、わたしたちプログラムオフィサー(PO)が「教える」のではなく、POと共催団体が「ともに」学び合う関係性へとより変化してきていると思います。4年目にして、参加者のなかに「東京アートポイント計画という一つのチームのなかで切磋琢磨する仲間」という感覚ができてきたのではないのでしょうか。

特に今年は「事業評価について考えたい」など、共催団体からの悩みやアイデアに端を発したテーマの勉強会を行いました。アートプロジェクトは、来場者数などの数字で測れるものだけが成果ではありません。そのため、年度末に数字やアンケートを集計するだけでなく、目標を立てる段階で、具体的な「今年のゴール」を定めておくと、より事業評価が

しやすくなります。

例えば、「ステークホルダーを広げたい」では、何人が、どんなふうにかかわれば目標を達成したことになるのかわかりません。なので、これでは目標として不十分で、「自分たちにとってどんなステークホルダーが必要なのだろう?」と考え、「教育に関するパートナーを三つ増やす」という目標を細分化したアクションプランを立てる。そうすると、評価の段階で「地域の小学校と連携した活動ができて、こんなことが起こりました」という具体的なエピソードが語れるようになるんですね。目標とアクションプランを紐づけて考えることの重要性は、とある団体と話していて気づいたことだったのですが、ほかの人も同じ局面で思い悩むことがあるだろうと、ジムジム会でもほかの団体に手法を共有することにしました。

事業評価で自分たちの強みに気づくことができると、団体の足腰が強くなるし、自分たちで成長度が確認できますよね。一つの現場で大切なことを見つけたら、一度引き取って、ジムジム会でともに学び、またそれぞれの現場へ。現場の声をきっかけに考え方や技術を更新していく流れをつくっていきたくと思っています。

活動の発展につながる機会

—— また今年にはほかの団体へのヒアリングを行いましたよね。どのような収穫がありましたか？

これまでのジムジム会では、ゲストを招いたトークや、複数団体でのディスカッションを行う形式がほとんどでした。今年は外へと飛び出し、話を聞きに行きたい団体を訪ねるヒアリングを実施。卒業団体を訪れる団体もあり、共催終了後の試行錯誤や活躍も聞こえてきました。

アートプロジェクトを継続させるためには、1年目から「どんな人と出会い、つながっていくか」を念頭に置いて、お互いに頼り合えるパートナーを同心円状に増やしていくことが重要です。今年度からはじまった『カロクリサイクル』は、同じ災関・減災をテーマにした『イザ!カエルキャラバン!in東京』を共催していた(2009~2011年度)、NPO法人プラス・アーツのもとを訪れました。

『イザ!カエルキャラバン!』は、1995年の阪神・淡路大震災の教訓から、2005年にスタートした、遊んで学べることも向けの防災訓練です。復旧期を経て、人々の生活が落ち着いて防災を意識できる復興期になるのを待ち、震災10年後から活動を開始。同じ

ようにちょうど東日本大震災から10年あまりが経ったので、そろそろ東北での活動を考えようとしていたタイミングだったことがわかりました。

一方の『カロクリサイクル』のメンバーは、2011年の東日本大震災の直後から、東北で記録と表現にまつわる活動をしてきたアーティストたち。今回のヒアリングをきっかけに、『カロクリサイクル』が東北のネットワークを紹介することや、プラス・アーツがつくってきた防災カードゲームなどを『カロクリサイクル』の拠点でいかしてはどうか、など新しい展開が生まれそうです。互いの活動を学ぶだけではなく、それぞれの活動の発展につながる機会になった手応えがありましたね。

—— パートナーが増えた感じがありますね。共催年度が進むと、よりこのような関係が増えていくのでしょうか？

そうですね。共催期間は無限ではありません。卒業後に持続的な活動を続けるためにも、さまざまなパートナーとかかわる必要があると考えているので、共催年度が長くなってくると、協働するパートナーの数や規模が変わっていくのが理想です。例えば、共催5年目の『Artist Collective Fuchu [ACF] (以下、ACF)』は、2021年より府中市の市民提案型協働事

ディスカッションタイム

- 自己評価について
... (ひとりではなく) チームとしてどうやって自己評価をしている? / 自分たちの売りポイントや評価軸はどう共有している?
- 外部評価について
... 自分たちの事業を誰に見てほしい? (美術関係者? 行政職員? 学校関係者?) / 卒業後は誰が見てくれるの?
- 評価の素材の集め方について
... アンケートの回答率を上げるためには? / プログラムが違っても同じアンケートフォーマットでいいの? / アンケートの内容のこと (性別はきく? きかない? など)
- 10年事業を続けるための姿勢について
... 今年の目標のさらに先は、何年後を見据えている? / 卒業後も使える評価を行うには?

事業評価について、オンラインでディスカッションをしたときの様子





卒業生へのヒアリングの様子



府中市・ウィーン市ヘルナルス区「友好協定締結30周年記念展」の会場風景

まずは 歩いてみることから



森 司
MORI Tsukasa

文化事業者にとって2022年はどのような年だったか。
コロナ禍が以前より落ち着きを見せたいま、これからの態度について語りました。

対応より、「まずは歩いてみる」勇気を

—— 東京都の文化事業者にとって、今年はどういう一年でしたか？

この2年間、文化事業はコロナ禍で「待機」を余儀なくされ、一進一退する状況に「応答」することを迫られてきました。しかし、2022年は国内外の旅行が復活、感染者数の把握方法も変わるなど、是非はさておき、社会がウィズコロナへ本格的に移行した感があります。そうした状況で文化事業者に求められるのは、「まずは歩いてみる」態度だと考えています。

9月には、聴覚障害者の総合スポーツ競技大会「デフリンピック2025」の開催地が東京に決定しました。それに先行して都は3月、今後数年の文化政策を方向付ける「東京文化戦略2030」を策定。誰もが芸術文化を楽しめる環境づくりを施策に掲げています。僕は公益財団法人東京都歴史文化財団内でこれを推進する事業「クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー（CWT）」に携わっていますが、人の多様な背景を踏まえてアクセシビリティを向上させることで、さまざまな人にひらかれた文化プログラム

を実施しようとする動きは、社会的に加速していくと感じています。

—— 今後キーワードになってくる「ウェルビーイング」という理念をどのように認識されていますか？

「ウェルビーイング」という理念には難しさを感じています。なぜなら、人はそれぞれの身体や年齢などの違いで「ウェル」の条件が違うのに、社会はいつも競争の原理で動いているからです。「障害」は個人と社会の関係性の内に生じるもので、ほんとうにウェルビーイングを目指すなら、まずは一人ひとり



「クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー（CWT）」のウェブサイト

業の一環として、地域企業から集めた端材を創造活動に再利用する「ラッコルタ-創造素材ラボ-」を行っています。それをきっかけに、今年度は府中市とウィーン市ヘルナルス区との友好協定締結30周年を記念した展示を担当することになりました。

展示では体育館ほどのホールを、大きな白い布などを使って仕切り、「窓」をモチーフに府中市とウィーンの日常、そして交流によって生まれた非日常の記録写真を映し、音や光を交えて立体的なインスタレーションを手がけました。小学生がワークショップでつくったランタンや、互いの都市をホームステイで訪れた高校生によるパネルも一緒に飾られ、参加した人たちの顔が見えるあたたかな場となりました。ACFのメンバーそれぞれの特技をいかしながら、府中市ならではの展示に仕上がりと、さまざまな方がよろこんでくれましたね。

今回のACFのように、それぞれの地域で「この人たちに相談してみよう」と思ってもらえるような存在になること。そのために実績をつくり、信頼関係を築くサポートをすることも中間支援の大切な役割だと考えています。外部からの仕事を受けることで「自分たちが実現したいこと」の持続可能性を高められますよね。自治体、企業、地域住民など、さまざま

な人々との協働が自然と起きはじめているところに、団体としての成熟を感じます。

垣根なく関係性を結ぶことから

—— 今後はどういったかたちでつながりをサポートしていきますか？

東京アートポイント計画という大きなコミュニティのなかで、垣根なく関係性を結んでいくことから、成長するための場づくりがはじまります。1年目の共催団体が抱えている課題は先輩団体がかつて通った道かもしれないし、先輩団体も意識的にこれまでを振り返って言語化することで、現在の課題を解決するヒントや次の展開が見えてくるかもしれない。そこにはもちろん、POが中間支援をする上でのヒントも、多分に含まれています。

2022年度は9事業だったので、それぞれ別のテーマに取り組む9団体がいるということになります。多文化や災害、コミュニケーション、地域の拠点のあり方など、アートプロジェクトの最前線で社会的な課題に対する試行を重ねている仲間がいる。そう考えることは強みだと思います。ジムジム会とともに学びながら、有機的なつながりを積極的に設計したいですね。

の多様性を見ないといけない。ウェルビーイングと多様性は地続きの問題だと考えています。

多様性は元来、文化の得意分野です。最近は逼迫する医療やケアの現場から、文化の多様性を活用したいとの声も増えました。しかし、文化側が従来の価値観にこだわるあまり、そうした他分野の要望に対応できないこともあります。これが重要な課題です。

昨年、目から鱗だったのは、認知症の人を支援する地域包括支援センターの社会福祉士の方に、「認知症の人のための事業ではなく、認知症の人が行ってもいい場所にして欲しい」と言われたことでした。要は、当事者に向けた直接的な対応ではなく、来たただ受け入れてほしい、何かあれば慣れた支援者側が対処するから、と。これを聞いて、文化側の人間が殊更何かせねばと思うこと自体がおこがましくて、まずは受け入れて経験を積むこと、「悩むより慣れろ」だと教わった気がしました。認知症は特別なことではなく、既に多くの当事者がいるのだから、まず受け入れる。そしてその経験から変わっていきなやかさが必要で、「まずは歩いてみる」にはそんな意味も込めています。

文化と他領域の「乳化」が必要

—— 2022年度、そうしたしなやかさを感じたプロジェクトは何ですか？

2022年度からはじまった『めとてラボ』『KINOミーティング』『カロクリサイクル』ですね。例えば、コミュニケーションの新しいあり方を開発しようとしている『めとてラボ』では、メンバーはやりたいことはあるけれど、何からはじめるべきなのかわからなかった。だから自覚的に彷徨うしかなく、たくさん人に会いに行き、話し合っ、ぶつかったり失敗したりしながら、歩んでいったんです。よい彷徨い方をしたな、と思っています。

アートプロジェクトが、決まったゴールに突き進むエ

ンターテインメントと違うのは、前者にはある瞬間プロジェクトが自走しはじめる感覚があることです。「プロジェクトがわたしを運んでいく」ような感覚があるとよい取り組みになっているのだと考えています。自分のプロジェクトで、自分が育っていくんですね。

先ほどの三つのプロジェクトにはその感覚があるのですが、それには担い手の特性も関係していると思います。『めとてラボ』は手話話者が中心で、『KINOミーティング』を運営する阿部航太さんはブラジルで街取材してきたデザイナー、『カロクリサイクル』の一般社団法人NOOKは、震災後の東北で10年間活動してきたチームで、それぞれ自分とは異なる経験をもつ「他者」と深くかかわってきました。内発的なアーティストはよくも悪くも自力本願ですが、この人たちはよい意味で他力本願。他者に自分をひらいて、その関係性のなかで変わることができる新しい担い手のイメージを感じて、接していてとても新鮮です。

—— 既存の「アート」に頼らない取り組みが生まれてきているのでしょうか？

そうですね。2022年度は、所謂「表現領域」ではない人たちの文化への期待が高まったように思います。逆に言えば、なぜそうした人たちが文化に期待してくれるのか、その理由を見誤らないようにしないと、従来の文化の人がしていた考え方は一気に古くなると思います。アートの人が自分の得意と考えるゾーンがあるとしたら、いま新しくアートに関心をもつ人が魅力を感じるの、その部分ではないこともある。そのとき、我々がいつの間にか身につけた既存概念や価値観を上手に脱がないと、いつまでも両者は溶け合うことができません。

水と油のように本来混ざり合わないものが混ざる現象を「乳化」と言いますが、先に触れた取り組みでは、そうした意味でアートと日常、他領域との乳化が起きています。その担い手に「アート」をやっている自覚はないかもしれないけれど、何かと何か混ざり合うことを感覚的に知っている人が、手探り

でそれを目指すこのチャレンジ感こそ、僕の考える「現代アート」なんです。

シェルターとしての文化をつくる戦略

—— アートや文化に対する社会の期待は上がっているのでしょうか？

その機運は感じます。消費や所有の対象ではなく、もっとプライスレスな社会参加の場としてこれほど文化が期待された時代はないのではないのでしょうか。ただ、20世紀の二度の世界大戦のあとに文化が大きく花ひらいた歴史を踏まえれば、この機運の背景には時代のきな臭さがあるのかもしれない。つまり、多くの人が生き物として「ヤバイ」肌感覚を抱いていて、文化をシェルターにしはじめているのかもしれない。

文化が確実にその位置と意味を変容させ、必要とされている。そうしたなか、シェルターとしての文化をちゃんとマネジメントできるのかを問われているように思います。そして手前味噌ですが、東京アートポイント計画はそうした取り組みを社会がまだ元気なうちからはじめていて、しなやかな技術とチームをもつことができていると自負しています。

その一方で、社会がこれだけ変動すると、事業設計の方法も変えざるを得ません。具体的には、これからの事業設計はバックキャストिंग、すなわち、はじめに「こうありたい」という未来像を描き、それに向かって現在の行動を決めるかたちでしかあり得ないと思っています。これまでの経験値や前例が土台として機能しないからです。

東京アートポイント計画では、バックキャストिंगの思考で事業を進める上で、仮説と実証の指標をもつことが重要だと考えて、プロセス評価の視点を導入しはじめました。自分たちの描く未来像に到達するために、「いつまでに何をするか」という時間軸をもち、我々とNPOとで現状や課題を洗い出し、フラットに共有しながら、事業の価値化に取り組んでいきたい。

無論、文化事業にはそのような考え方からこぼれ落ちるものがあります。だからこそ、ロジカルに解決できる問題は解決すればいい。時代があまりに不定形で予見性がないので、事業の基準や芯は自らつくっておきたいのです。これからも、目指す未来像と目の前の現実を行き来しながら、この時代を一步步つ歩いていきたいと思っています。



事業の目的や成果を確認するために、共催団体との間で使っている「総括評価シート」

事業予算

東京都の年間文化振興予算は、192億5200万円です。そのうち公益財団法人東京都歴史文化財団の一組織であるアーツカウンシル東京は、26億7300万円。わたしたちは、2事業を合わせて、年間「1億3220万円」（外部予算を含む）の予算規模で動いています（令和4年度）。予算時点での概算にて、事業予算についてご紹介します*。

東京アートポイント計画
9020万円
[財団予算8600万円+外部予算** 420万円]

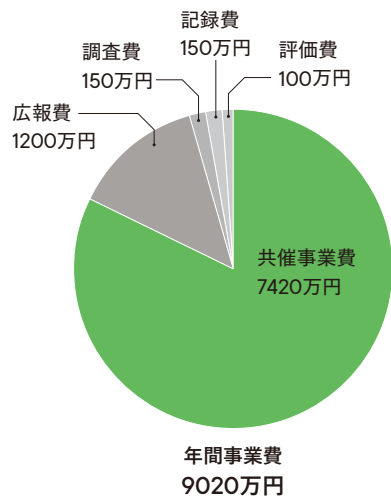
tarl TOKYO ART RESEARCH LAB
4200万円
[財団予算4200万円]

*金額はすべて「約」です。 ** 基礎自治体負担金等。

東京アートポイント計画では、共催団体と協議し、毎年予算計画を立てています。どのくらいの規模であれば、無理なく運営ができるのか。事務局を担うNPOの体力や伸びしろを見極め、予算を調整。2年目以降の事業は増額してマネジメント力を鍛えたり、あえて減額して活動の質を高めたりするなど、常に事業の適正規模を探っています。

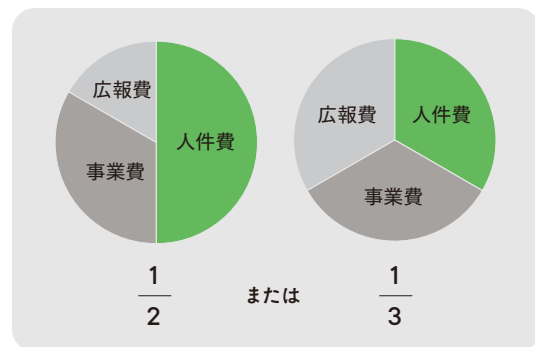
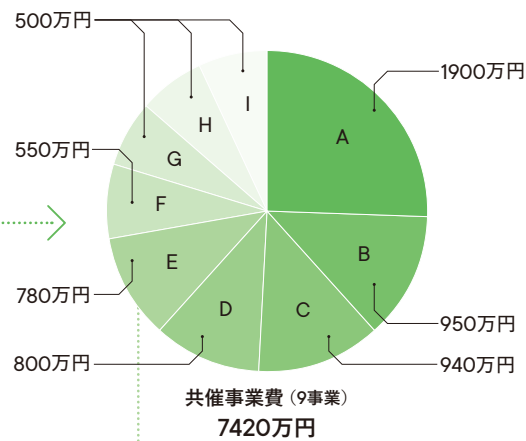
[東京アートポイント計画の年間事業予算内訳]

事業予算の大部分は、「共催事業費」です。そのほかに共催団体を含むすべての活動の「広報費」、出張や書籍購入などに使う「調査費」、事業の「記録費」「評価費」があります。



[各共催団体の年間事業予算内訳]

共催期間や事業の目的、特徴に合わせて、適正規模を協議。立ち上げは500万円からスタートすることが多く、それ以降は外部予算の状況により1000万円以上になることもあります。



[共催団体における予算の割合例]

アートプロジェクトでは、企画制作費に対する助成がほとんどで、人件費も含めた支援はまだ国内では多くありません。東京アートポイント計画では、持続可能な活動を行うために、共催団体の「人件費」を全体予算の1/2または1/3の割合になるように設計しています。

事業一覧

2022年度の東京アートポイント計画は、都内のさまざまな地域で9つの事業を行いました。自分たちの活動拠点を地域にひらいている場所もあります。次のページから、各事業の概要と今年度の取り組みをご紹介します。

国立市

ACKT
(アクト/アートセンタークニタチ)

さえき洋品●(てん)
国立市谷保5014-4
開室準備中
▶ p.28

都内各所

KINO
ミーティング

▶ p.29

めとてラボ

▶ p.30

多摩広域 (東村山市、国分寺市、小金井市ほか)

多摩の未来の地勢図
cleaving art meeting

▶ p.28

墨田区

ファンタジア!
いふふふふふ

藝とスタジオ
東京都墨田区東向島5-23-3
不定期開室
▶ p.27

撮影:加藤 甫

江東区

カロクリサイクル

studio04 (ゼロヨン)
江東区大島4-1
UR都市機構大島四丁目団地内
開室準備中
▶ p.29

神津島村

HAPPY TURN
/ 神津島

くると
東京都神津島村998
毎週木・金・土曜日 10:00~16:00開室
http://happyturn-kozu.tokyo/about_kuruto
▶ p.26

府中市

Artist Collective Fuchu

やど(仮)
府中市矢崎町4-1
大東京総合卸売センター 第4通路
不定期開室
▶ p.26

世田谷区

移動する中心

▶ p.27

画像 | ©2021 Data SIO, NOAA, U.S. Navy, NGA, GEBCO, Data Japan Hydrographic Association, Landsat/Copernicus, Data IDEO-Columbia, NSF, NOAA, 地図データ | ©2021

▶ HAPPY TURN／神津島



島をめぐる「幸せなターン」を見つける

豊かな自然、神話や独特な風習が残る神津島村を舞台に、人々が島での暮らしに愛着をもち、自分ごととして島にかかわる土壌を育むプロジェクト。新たな価値観との出会いや発見によって、自分自身でつかむ変化のきっかけを「幸せなターン」と捉え、これからの生き方のヒントを探る。もともと島に住む人だけではなく、移住者や観光客、島を離れて暮らす人ともつながりながら、それぞれの考え方や文化を学び合う場をひらいている。

2022年度の活動

今年度も「アーティスト・プログラム in 神津島」を開催。アーティスト集団・オル太はオープンスタジオや、住民の話などを手がかりにしたパフォーマンスと展示などを行った。美術家・山本愛子とアーティスト・大西健太郎は、昨年度に引き続き参加。これまで接点の少なかった中高生などの参加者とともに、島ならではの素材を使った染色ワークショップや、季節風をテーマにした創作ワークショップを行い、見慣れた風景を捉え直す機会が生まれた。ミュージシャン・テニスコーチは、「つくって、うたって、あるいて、おどって、大漁だ!!」を合言葉に、島を巡り、島に伝わる唄や踊りをみんなで披露するお祭りを開催し、さまざまな世代が島の文化を体感する経験となった。

また、誰もが自由に使える活動拠点「くると」では、小学校の図工の授業に使われたり、高校生が自習に使ったりしているほか、道行く人や旅人、子どもたちが日常的に集まっている。

共催 一般社団法人シマクラス神津島

場所 神津島村

URL <http://happyturn-kozu.tokyo>

▶ Artist Collective Fuchu [ACF]



(撮影 | 深澤明子)

「誰もが表現できるまち」を目指して

府中市に暮らす、職種も年齢も多様なメンバーが集まり、身近なところにある「表現」を通して「だれもが表現できるまち」を目指すプロジェクト。異なる視点に触れ、互いの違いを尊重し、自由に活発な表現ができる土壌づくりを行っている。行政や企業、市民などさまざまな役割をもった人たちと連携し、プロジェクトを実施している。

2022年度の活動

昨年度から府中市の市民提案型協働事業として始動した「ラッコルタ 創造素材ラボ」は、企業から製造過程の端材や不要な部品の提供を受け、表現活動の素材として再利用する仕組み。なかでも、小さな部材で扱いやすいダンボールチップを使ったワークショップが好評を博し、市が主催する催しへの出展や市内外の学校教育の現場でも活用された。また、アートユニット・MATHRAXとは石材を使う新たなワークショップに取り組んだ。市内外の企業からも、さまざまな部材が集まっている。

プログラムが多岐にわたり、チームごとの動きが活発化していくなかで、活動拠点の必要性が高まったため、大東京総合卸売センター（府中市場）の空きスペースで「やど（仮）」プロジェクトを実施。これまでの活動を紹介する展示など、期間限定のスペースとして運営している。

また、地域FMで番組『おとのふね』の配信（月1回）、かわら版『かみひこうき』の発行など定期的な情報発信に取り組んだ。

共催 特定非営利活動法人アーティスト・コレクティブ・フチュウ

場所 府中市

URL <https://acf-tokyo.com>

▶ ファンタジア! ファンタジア!—生き方がかたちになったまち—



(撮影 | 高田洋三)

「当たり前」を解きほぐし、創造力を育む

2000年代初頭の住民主導のアートプロジェクトをきっかけに、現在も多くのアーティストが暮らす墨田区北東部（通称：「墨東エリア」）を舞台に、地域の人々がアーティストや研究者との出会いを通じて、豊かに生きるための創造力を育む「学びの場」を生み出す試み。他者との対話で生まれる気づきを通して、自分自身の想像の幅を広げ続け、自分のなかの常識や「当たり前」を解きほぐす小さな実験をしかけている。

2022年度の活動

昨年度から続く、1919年に発足した福祉施設「興望館」とのプログラムでは、地域福祉とアートのつながりを考える展覧会「共に在るところから/With People, Not For People」を開催。アーティスト・碓井ゆいが、セツルメント運動の資料や、興望館の写真や保育日誌、同人誌などの膨大な記録をもとに新作を発表。また、職員や卒業生、父母会などと協働して、刺繍作品も制作した。

墨田区で行われてきた文化活動のアーカイブをつくるプログラム「スミログ」では、アーカイブをテーマに活動する地域のNPO法人と連携を図るなど、さまざまな個人や団体が交わり、情報共有や交流を行った。

公募メンバーとの活動「ファンファン倶楽部」では、アーティストとまちを歩いたり、対話を通じてアイデアなどを共有したりして、参加者それぞれが自分なりの「もやもや」との向き合い方を考えた。

共催 一般社団法人藝と

場所 墨田区内各所

URL <http://fantasiafantasia.jp>

▶ 移動する中心 | GAYA



(撮影 | 尾山直子)

ホームムービーを囲んで、語りの場をつくる

世田谷区内で収集・デジタル化してきた、昭和の世田谷を映したホームムービーを活用して、語りの場をつくるコミュニティ・アーカイブプロジェクト。初詣、海水浴、運動会、遊園地、雪遊びといった、8ミリフィルムに写された記録をきっかけに、自分たちの生きる「いま」を考える。また、プロジェクトとともに動かす担い手の育成も目指す。

2022年度の活動

ホームムービーをきっかけに語られる声の採集を目指して「サンデー・インタビューーズ」のプログラムを継続して展開。8ミリフィルムの被写体の世代であるロスジェネ世代のメンバーが、毎月第4日曜日にオンラインで集合。映像をじっくりひとりで「みる」、気づいたことをみんなで「はなす」、気になったことを人に「まく」という三つのステップに取り組んだ。また、新規メンバーの募集を行い、コミュニティアーカイブに取り組む方など、全国各地からの参加があった。

また、ケアやまちづくりといった領域で映像を活用するために、区内をフィールドに活動するデザインリサーチャー・神野真実、看護師兼写真家・尾山直子と連携。商店街振興組合や居酒屋、地域包括支援センター、在宅医療を受ける患者さんの自宅で、8ミリフィルムの映像を観ながら対話する場をつくるなど、隣接領域への展開に向けた試行錯誤を重ねている。

共催 特定非営利活動法人記録と表現とメディアのための組織 [remo]、公益財団法人せたがや文化財団 生活工房

場所 世田谷区

URL <https://aha.ne.jp/project/gaya>

▶ ACKT (アクト/アートセンタークニタチ)



まちを舞台に編まれる芸術と文化

国立市文化芸術推進基本計画が掲げる「文化と芸術が香るまちにたち」の実現に向け、行政と市民、そして市外からかかわる人々が交流し、新たなまちの価値を生み出していくプロジェクト。アートやデザインの視点を取り入れた拠点づくりやプログラムを通じて、国立市や多摩地域にある潜在的な社会課題にアプローチする。

2022年度の活動

まちのなかで当たり前になった風景や、使われていない場所をまちの余白(○)と見立て活用するプロジェクト「遊○地(ゆうえんち)」を本格的に開始した。その一環として、国立駅から続く大通り「大学通り」の緑地帯にランドマークとなるテントを設置し、日常に新しい光景を生み出す「と-TENTO-」を実施。巨大な地図を広げ、市内のおもしろい取り組みや遊休地の情報、まちの歴史についてヒアリングしたり、活動紹介を通して相手と連携する方法を探ったりと、道行く人々と交流を行った。さらに、谷保駅の近くにある古い店舗跡を活動拠点としてひらくため、市内の参加者、関係者とともに準備を進めている。

また、土器作家・熊谷幸治による土器づくりワークショップ「谷保村式土器」を開催。参加者は土に触れることを通して、田んぼや畑、湧水など、国立市谷保エリアならではの豊かな自然を手で感じながら、思い思いのかたちづくりを楽しんだ。

共催 国立市、公益財団法人くにたち文化・スポーツ振興財団、一般社団法人ACKT
場所 国立市
URL <https://www.ackt.jp>

▶ 多摩の未来の地勢図 Cleaving Art Meeting



一人ひとりが自分の暮らす足元を見つめ直す

多摩地域の文化的、歴史的特性を踏まえ、その「地勢」を探ることを通して、一人ひとりが自分の暮らす足元を見つめ直すプロジェクト。NPO法人アートフル・アクションが、多摩地域における創造的な中間支援のあり方を模索しながら、教育機関や児童養護施設など多様な団体と協働し、さまざまなプログラムを行っている。

2022年度の活動

昨年度に引き続き、教育機関や児童養護施設とともにさまざまなプログラムを展開。また、今日的な社会課題に向き合うためにネットワークの基盤づくりを進めている。

小学校の図工の先生とともに素材や技法を学ぶ「ざいしらべ」では、それぞれの授業で扱う表現や造形の拡張を促すきっかけづくりを行った。困難を抱えたこどもたちと向き合い、日々の業務に多忙な支援者のケアに取り組む「ゆずりはをたずねてみる」では、引き続き、音楽やダンス、こころと体をほぐすためのエクササイズを実施。二葉むさしが丘学園などの施設と協働して出張ワークショップを重ね、施設間の交流の可能性を探っている。

連続ワークショップ「多摩の未来の地勢図をともに描く」では、「あわいを歩く」をテーマに福島を訪れ、フィールドワークを行った。また、地名の由来など、暮らしのなかでの小さな問いを持ち寄り、ディスカッションを通して考えを深めていく「たましらべ」も続けている。

共催 特定非営利活動法人アートフル・アクション
場所 多摩地域
URL <https://cleavingartmeeting.com>

▶ カロクリサイクル



禍録(カルク)を通して、災後のつながりをつくる

被災を経験した土地に蓄積されてきた記録物(禍録)や、防災やレジリエンスにかかわる知識や表現の技術、課題等を広く共有するプロジェクト。災間期をともに生き、次なる災禍に備え、災後も活用できるネットワークの形成を目指す。

2022年度の活動

本年度は主にリサーチとネットワークづくりに取り組んだ。東京都慰霊堂や都立第五福竜丸展示館などの戦災や震災、水害等に関する施設の視察を実施し、note「カルク探訪記」でレポートを発信。オンライン番組『テレビノック』では、禍録の活用をしているゲストを招いた対談を配信した(月1回)。また、これまでNOOKが取り組んだ活動と手法を紹介する場として、展覧会「語らいの記録 2011-2022」を開催した。また、ワークショップ「記録から表現をつくる」では、過去の記録物を見ながらの対話やフィールドワークを経て、参加者が関心をもつテーマでリサーチを行い、表現(かたち)にすることに挑戦。ワークショップ後も議論を重ね、展覧会を開催した。対話の場である「カルク・リーディング・クラブ」では、東京と岡山をオンラインでつなぎ、同時に同じ記録を見たのち、自身の暮らすまちや生活、災禍にかかわる記憶について言葉を交わした。

共催 一般社団法人NOOK
場所 江東区ほか
URL <https://www.artscouncil-tokyo.jp/ja/what-we-do/creation/hubs/karoku-recycle/52796>

▶ KINOミーティング



異なる「ルーツ」と出会い、協働の場をつくる

海外にも(も)ルーツをもつ人々とともに、都内のさまざまなエリアで映像制作を中心としたワークショップを行うプロジェクト。背景の異なる人々との出会いや対話を軸とした映像制作を通して、東京の「まち」や自身や他者への「ルーツ」について、新たな視点を獲得する機会をつくり出す。また、コミュニティの形成や参加者が主体的にかかわれるプログラムの研究・開発も目指している。

2022年度の活動

今年度は、二つのエリアで映像制作のワークショップを開催した。1回目は、池袋・板橋・大山・要町に思い出をもつ参加者が3人1組になってまちを歩き、写真と映像、音声を用いて、ドキュメンタリー映像「シネマ・ポートレイト」を制作。その後、異なるルーツや文化をもつからこそ見える東京のまちの様子やそれぞれの価値観を約10分の映像に落とし込み、『変身』『ひみつ』『JST(日本標準時)』という三つの作品を完成させ、上映会を行った。

2回目は葛飾区が舞台。漫画家・かつしかけいたをコラボレーターとして迎え、まちのリサーチを行いながら、地域に住む外国人へのアプローチを試みた。エチオピア、中国、バンラディッシュにルーツをもつ取材対象者とまち歩きしながら撮影を実施。普段は出会うことのない人々との協働を通して、ルーツやまちへの新たな視点を発見し、「まちの映画」を制作するチームづくりへとつながった。

共催 一般社団法人パンタナル
場所 都内各所
URL <https://www.artscouncil-tokyo.jp/ja/what-we-do/creation/hubs/kino-meeting/52795>

▶ めとてラボ



(撮影 | 池田 宏)

誰もが「わたし」を起点にできる共創の場を

視覚言語（日本の手話）で話そう者・難聴者・CODA（ろう者の親をもつ聴者）が主体となり、異なる身体性や感覚世界をもつ人々とともに、自らの感覚や言語を起点にコミュニケーションを創発する場をつくるプロジェクト。手話を通じて育まれてきた文化を見つめ直し、それらを巡る視点や言葉をたどりながら、多様な背景をもつ人々が、それぞれの文化の異なりを認め合った上でのコミュニケーションを研究・開発している。

2022年度の活動

自らの身体や言語を見つめ、それに合う空間を設計していくことは、それらを肯定していくプロセスでもある。拠点づくりのリサーチにおいて、“ろう者の身体感覚や手話言語からなる、会話空間を起点とした空間設計があるのではないか”という視点から、アメリカにあるろう者のための大学・ギャローデット大学の取り組みから生まれた「デフスペース」に着目。活動の一環として、福島、長野、愛知にある拠点や文化施設、各地域のろうコミュニティを訪れた。

また、手話は視覚を、音声言語は聴覚を起点としている。そのズレを意識しながら、手話通訳の現場においてどのようなルールや条件、進め方のリズムが必要なのかを探究し、技術やツール開発を行う「つなぐラボ」を開始した。手話通訳者だけではなく、さまざまな言語間の通訳者、翻訳者にヒアリングを行っている。

そのほか、暮らしのなかの手話の記憶・記録の「アーカイブ」にも取り組みはじめた。

共催 一般社団法人ooo

場所 都内各所

URL <https://note.com/metotelab>

2 Tokyo Art Research Lab (TARL)

<https://tarl.jp>



アートプロジェクトに必要な技術を学ぶ

アートプロジェクトを実践する人とともに作り上げる学びのプログラム。現場の担い手を育てる「講座・演習」と、新たなスキルやシステムをつくる「研究・開発」の二軸で、東京アートポイント計画と連動しながら、来るべき社会に向けたリサーチや人材育成を行っている。

2022年度の活動

「講座・演習」では、新シリーズ「新たな航路を切り開く」をスタート。ナビゲーターに芹沢高志（P3 art and environment 統括ディレクター）を迎え、2011年以降に生まれたアートプロジェクトと、それらを取り巻く社会状況を振り返りながら、これからの時代に応答するアートプロジェクトを考えるプログラムを展開した。そのほか、アートプロジェクトの運営を初歩から学ぶ映像講座や、配信・収録の考え方を学ぶ講座、ウェブサイト制作の手引きとなるツール開発、3年目となる手話講座など、現場に必要なスキルを身につけるためのプログラムを多数実施した。

「研究・開発」では、各プログラムの成果や実践者の気づきを共有化するために、書籍制作などに取り組んだ。例えば、レクチャールームやアーカイブセンター、配信スタジオとして利用してきた「ROOM302」のクローズに伴い、この場所で起きた10年以上にわたる取り組みを振り返り、一冊にまとめた。また、利便性やアクセシビリティの向上を考慮し、7年ぶりにウェブサイトのリニューアルを行った。

お知らせ Information

Mail News

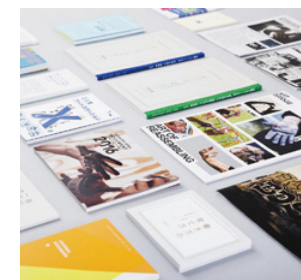


毎月1回、メールニュースをお届けしています!

アートプロジェクトの現場の最新のイベント情報やレポートなどを「Artpoint Letter」としてお届けしています。希望される方は、こちらからご登録ください。



Book



事業で制作した記録集やメディアをPDFで公開しています。

Tokyo Art Research Lab (TARL) のウェブサイトでは、東京アートポイント計画やTARLで制作した冊子等のPDFを280点以上公開しています。事業運営や研究に、ぜひご活用ください。

<https://tarl.jp/archive>



『これからの文化を「10年単位」で語るために —東京アートポイント計画 2009-2018—』 (2019年)

中間支援の9の条件、これまでの歩み、プロジェクトインタビューやドキュメント一覧など、10年間の試行錯誤を収録。下記にてPDFを公開しています。

https://tarl.jp/archive/artpoint_2009-2018

Artpoint Reports

2022 → 2023

編集 | 川村庸子
執筆 | 佐藤恵美、杉原環樹、遠藤ジョバンニ
アートディレクション&デザイン | 北岡誠吾
デザイン | 原田 光
印刷 | 株式会社歩プロセス

プログラムオフィサー | 大内伸輔・岡野恵未子・小山冴子 (アーツカウンシル東京)
監修 | 森 司 (アーツカウンシル東京)

発行 | 2023年3月25日 第1刷発行

公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
〒102-0073
東京都千代田区九段北4丁目1-28 九段ファーストプレイス5階
TEL 03-6256-8435 FAX 03-6256-8829
<https://www.artscouncil-tokyo.jp>
©アーツカウンシル東京
ISBN978-4-909894-40-3 C0070

営利・非営利問わず、本書のコンテンツを許可なく複製・転用・販売などの二次利用することを禁じます。





2023



2023

